

いのち
生命の水 うるおす未来

アジアネット

JAFS

NEWS & REPORTS 2022年春

149

特集

コロナ禍の中で⑧

学びの最前線、工夫と苦悩



「巻頭言」よいことは必ず出来る 02

コロナ禍の中で⑧

学びの最前線、工夫と苦悩

学校が家にやって来る 04～07

コスモニケタン学園 存続ピンチ 08・09

最下層の人たちが青空寺子屋 10～11

農民や漁師と仕事づくり他 11

フィリピン台風ライ緊急支援報告 12～14

人付き合いの大切さ——ネパール駐在記 15

アジアの教育現場から支援の要請 16・17

アジアの子どもたちを支え励まし30年 18・19

「井戸ができた村」 20～23

東日本大震災10年後の復興支援地 24・25

「JAFSプラザ」=国内の活動 26・27

コロナ禍ニモ負ケズ…アジ・フェス130人が

交流／岡山に広げる歌声の輪／オンライン

でワンフェスユース／ネパール報告にワク

ワク／里山・プラごみ…SDGs を考える

新入会員紹介・領収報告 28・29

「活躍するアジアン」 30

「環境コラム」 31

巻頭言

中学進学時に親元を離れ、大学卒業までを過ごした母校自由学園に在学中、数々の困難や試練に直面した時に幾度となく恩師や先輩からかけられた言葉「よいことは必ず出来る」。自由学園創立者羽仁もと子著『教育30年』（婦人之友社）にあるこの言葉は、私の人生訓でもあります。その一部を抜粋します。
 「虫のよい骨を折らない工夫ばかりしていると、それはちょうど寄生虫のような生活になります。（中略）いつのまにか希望のない力のない人になってゆきます」
 「一人一人の弱い力だけでは到底完全には出来得ないことです。それゆえに神様は私どもに多くの友を与え、さまざまな機会をつくってください、またそのおりおりに必要な沢山の慰めと励ましを用意してください」
 よいことをするのは、いつの場合でも必ずはじめに損です。本当の文化は一人一人の犠牲と忍耐と智慧と力をもってする志から生まれます。そうしてだんだん多くの人々の共鳴の力で、大いなる社会の信条にまでなつてゆきます。払った犠牲と苦痛に幾倍もする報いが天から来ます。すなわち「よいことは必ず出来る」

よいことは必ず出来る



松原 正

アジア協会アジア友の会
常任理事

の会の活動は全てSDGsに通じていると言っても過言ではないと思っています。
 多くの企業や団体がSDGsに取り組んでおり、今ではSDGsの取り組みがあたりまえとなりつつあります。
 その活動が進む一方で、新型コロナウイルスの感染拡大が、世界中の人々の命、生活、尊厳すなわち人間の安全保障に対する脅威となり、SDGs達成に向けた取り組みの遅れ

●プロフィール●

まつばら・ただし 1962年大阪府枚方市生まれ。86年自由学園最高学部（大学）卒、タカラベルモント（株）入社、2013年（株）かんぼう入社、代表取締役就任、16年全国官報販売協同組合理事就任。17年JICAの支援事業に採択され、ネパールでみつまた栽培・加工技術の普及をODA事業として展開中、20年JICA-SDGsパートナーに認定される。JAFS理事、SDGs委員会委員長。

中学進学時に親元を離れ、大学卒業までを過ごした母校自由学園に在

誰一人取り残さない、人々が人間らしく暮らしていくための社会基盤を2030年までに構築する、世界共通の目標であるSDGs。

が懸念されています。

JAFS 会員綱領

私たちは、世界の平和と人間の基本的人権を守るために人々との「友情と信頼」に基づく「理解と協力と連帯」の輪をアジアと世界に広げます。

一、より人間らしい地球社会の創造をめざします。
 一、アジアと世界の人々の幸せに奉仕します。

一、地球の自然環境を大切に守ります。

一、生活の無駄を省き、地球資源を大切にします。

一、これらの奉仕活動を通して、自分と他人の生命の価値を高めます。

以上

School comes home 学校が家に やって来る

「ネットない子見捨てない」

日印友好学園 パダトラ小学校

休校を逆手に出張授業

新型コロナウイルス感染症は、最初の大流行から今春で2年が過ぎましたが、新たな変異株であるオミクロン株による第6波の流行が全世界に広がり、まだまだ収束のきざしが見えません。JAFSが支援活動をしているアジア各国でも、大勢の人が感染し、命と暮らしを脅かされています。とりわけ深刻なのが、未来を担う子どもたちが、長らく休校などによって、かけがえない教育の機会を奪われています。そんな現状に「黙って待つだけでは何も変わらない。私たちにも、できることがあるはずだ」と学校の教師や、日々生きるだけで精一杯なはずの貧しい親たちが、子どもたちのために立ち上がりました。一方、生活苦から学校を辞める子が増えて収入を絶たれ、教師の給料が払えず存亡の危機に立たされている学校からは、支援を求める訴えが来しました。前号に引き続いて、アジアの学びの最前線から届いたレポートを紹介します。

●インド（2月3日）

RUDYA代表

カシナート・デオガデ

立ちはだかる貧富の差

マハラシュトラ州ガッチロリ県チャモシー地区にある日印友好学園パダトラ小学校は、同県で暮らす少数民族の子どもたちに教育を提供するために、2004年に開校しました。同県の少数民族の人々は、教育の重要性について認識していませんでした。子どもたちの生活に大きな変化をもたらすために、この学校はとても重要な役割を果たしています。

11年に初めての卒業生を輩出して以来、11年が経ちました。これまで親と一緒にジャングルをさまよっていた子どもたちが7年生まで教育を受けられるようになり、7年間の学校生活の中で、学びの大切さを理解することができるようになりました。

学校は19年までは順調に運営されていましたが、20年3月から新型コロナウイルスの影響により、学校運営に支障が生じるようになりました。

インド政府の命令とロックダウンにより、学校は休校を求められました。政府は感染状況を悪化させないよう試みましたが、状況は日に日に悪くなっていきました。政府は子どもたちの教育を継続させるため、オンライン授業を実施するよう求めました。

しかし、オンライン授業が受けられるのは、携帯電話やインターネット環境がある裕福な家庭の子どもたちだけです。パダトラ小学校に通う少数民族出身の子どもたちは、とても貧しく、彼らが住んでいる環境下ではネットや携帯電話がないため、オンライン授業を受けられませんでした。

中には、家に電気さえない子もいます。夜は勉強するためにオイルランプを使っています。都市部にある私立の学校を除き、政府が運営する学校でさえ、オンラインで授業を開講することはできませんでした。

4人の教師が家庭訪問

私たちは、一度勉強を中断してしまった生徒を再度教育の場に戻すことが難しいことを、よく理解していま

コロナ感染防止の休校中に生徒の家を訪問して勉強を指導するパダトラ小学校の先生＝インド、マハラシュトラ州ガッチロリ県チャモシー地区





体調が悪くなって学校の隔離室で横たわる生徒（上）と、休校中に家でヤギの世話をする生徒（下）。子どもたちの学びの環境は、とても厳しい
＝いずれもインド、マハラシュトラ州ガッチロリ県



した。そこで私たちは、学校の先生や保護者会のメンバーと話し合い、「School comes home（スクール・カムズ・ホーム＝学校が家にやって来る）」プロジェクトを実施することにしました。

パダトラ小学校には、1年生から7年生までの生徒と、4人の教師がいます。私たちは国のコロナ感染対策基準に従って計画を立て、毎週、生徒の村を訪れ、生徒たちを適切な場所に集め、授業をしました。授業後は、生徒たちに1週間分の宿題を課しました。

このプロジェクトによって、私たちは7年生までのすべての生徒に、休校期間中を含めたシラバスを終えること

ができました。

実際、プロジェクトの実施前は、生徒は休暇中に家に帰っても、親と一緒にジャングルに行ったり、農作業に行ったりしたため、勉強どころではありませんでした。しかし、今回のこの取り組みによって、生徒たちは勉強を継続し、打ち込むことができました。

最終学年が無事に卒業

政府のガイドラインにより、年次試験を行わずに次の学年へ進級させなければなりません。私たちは昨年の成績を考慮し、科目別の点数をつけました。

政府の規則により、今年度の新学期

は21年6月21日に始まりました。しかし、5カ月経たずにコロナの第3波がやって来ました。そのため、政府は再度、すべての教育機関を閉鎖するよう求めてきました。

しかし、生徒の親や社会活動家たちは、政府に学校を再開するよう求め、私たちの学校は22年1月24日に再開しました。現在、私たちの学校は通常通り開校していますが、一部の生徒はなぜやせき、熱に苦しんでいます。

このような厳しい状況の中で、先生たちは努力を重ね、最終学年の生徒たちを卒業させることができました。コロナ禍で移動制限があったため、先生たちが毎週、村を訪問することは非常



コロナ禍でロックダウンとなって人通りが絶えた村
＝インド、マハラシュトラ州ガッチロリ県

性の成長につながるような交流はオンライン授業ではできず、オンライン授業だけでは生徒の総合的な成長を妨げる可能性もあると感じていました。また、生徒も先生もオンライン教育のための十分な資料を持っていなかったため、村を週1回訪問するという対応を取りました。これが本校では功を奏したようです。

生徒たちは、最初は親とずっと一緒にいられることを喜んでいましたが、だんだん友達や学校生活が恋しくなっていたようです。生徒や保護者は、さまざまな場面で不安を表し、学校の再開を切望していました。

生徒や保護者は、学校の再開を喜ぶと同時に、教育の場から子どもたちが遠ざかってしまうことは、子どもたちの将来にも大きく影響するということを理解できるようになりました。そのため、勉強を継続し、成し遂げたいと強く思うようになりました。

ール・カムズ・ホーム」プロジェクトを受け入れてくれるようになりました。

先生たちは、オンライン教育も選択肢の一つではあるが、課外活動や人間

ます。学校の先生でさえ、村を訪問し、授業を実施することを、なかなか歓迎してもらえませんでした。しかし、十分な感染予防対策を講じて実施していたため、村人は少しずつ「スク

募金期間 4月1日～6月30日

募集金額 400万円

募金方法 同封の振込用紙をご活用ください。HP (<https://jals.or.jp>) のトップページ「コロナ募金」をクリックすると、クレジットカード決

済もご利用いただけます。
※コロナ募金の上記以外の支援内容に関しては、同封チラシをご参照ください。
※本寄付は寄付金控除の対象となります。

コロナ困窮者支援募金——未来をあきらめない子どもを一人でも増やしたい——

コロナの影響で苦境にたたされているアジアの子どもたちが、教育の機会を奪われないように支えてください。

誌面で紹介しているインドのパダトラ小学校やコスモニケタン学園を

コスモニケタン学園 存続ピンチ

インド、カルナータカ州ビジャプールにある日印友好学園コスモニケタンは、開校して20年余を経て、これから現地提携団体のみでの自立運営を目指す途上にあります。しかし今、コロナの流行により収入が激減し、経済的に存続の危機とも言える苦況に陥っています。現地から支援を求めるレポートが届きました。

コロナ下でようやく再開した学校にスクールバスで通う中学生
インド、カルナータカ州



寮の閉鎖で収入絶たれ 教師給料・バス代払えず

●インド（2月7日）
日印友好学園コスモニケタン理事長 サチダナンド・クンバール
コスモニケタン中学校と小学校は、1995年から96年にかけて、インドのカルナータカ州のブルナプール村という辺鄙な土地に設立されました。この学校を始めた目的は、良い教育を受けることができない貧しい農村の子どもたちに、基本的な教育とともに道徳教育を提供することでした。
私たちは、社会や環境をより良くするために働くことができる良い市民を育てるという目標を、常に達成してきました。過去25年間、教師スタッフとアジア各地からのボランティアの努力により、この学校は地域で最高の学校の一つになりました。
この学校に通う子どもの親の9割は、農業か日雇い労働、さらには小商いなどをして生計を立てていました。コロナのパンデミックの間に仕事を失ったり、農作物を適正な価格で売ることができなくなったりしました。
生徒は7つの村から来ています。自転車通学や徒歩通学もありますが、ほとんどはスクールバスで来ています。
コロナの大流行の間、インフレにより、燃料その他の物価が非常に高くなりました。もともと貧しい親たちは、スクールバス代を払えなくなりました。ガソリン代の高騰も学校の財政を

直撃しました。
多くの生徒が勉強を続けられなくなりました。特に結婚を強いられて学校をやめている女子もいます。

基本的な学費を支払う余裕がない生徒に教育を無料で提供することができないためには、教育の最も根幹である教師に給料を支払う資金が必要です。

コロナ流行の前は、州内のさまざまな地域から来る子どもたちのための寮を運営していて、最小限の寮費でも収入源になっていました。その一部とJAFSからの支援を合わせ、教師の給料を支払うことができました。

しかし2年前から、寮は感染予防措置として閉鎖されており、寮からの収入は全くなくなりました。もちろん、入学する生徒も半減したため、生徒からの諸費用の収入も半減しました。

すべての職業に敬意を表すべきですが、教師という職業も、尊敬に値するものです。貧しい子どもたちへの教育に力を尽くしているコスモニケタンの教師たちは、良い処遇を受けるべきであると思います。

しかしその教師たちの給料が払えない事態に陥っている今、処遇の悪さは、心理的に教師の社会的地位を低める要素となりがちです。結果として教

2年間も閉鎖が続いているコスモニケタン学園の学生寮
インド、カルナータカ州



JAFS高槻が支援へ名乗り

師の意欲も低くなったり、優秀な教師は他の学校に引き抜かれたりします。

このままでは学校の存続が脅かされる
と危惧しています。

JAFS高槻は、地区会としてインド・コスモニケタン学園の支援を始めることにし、交流食事を1月16日に催しました。写真。学園を運営するBSVIA代表のクンバール夫妻やインド人留学生も参加し、コロナの影響で黙食となりましたが、インドカレーと一緒においしくいただきました。

クンバールさんからコスモニケタン学園の現状について報告がありました。JAFSの支援により、貧困層の多くの子どもたちが学ぶ機会を与えられたが、コロナの流行により、働きに出されたりするなど、家の事情で学校に通えない子が増えたということです。

以前はカメラを向けると笑顔で応えてくれた子どもたちが、今は撮られることを嫌がり避けている感じであるというのを、とても痛ましく思いました。子どもたちの精神的ケアや学習意欲向上のための心の支援も、国内から何らかの形で行えないか考える必要があると思います。

（JAFS会員 古井紀行）

最下層の人々が立った



休校の子らへ青空寺子屋

●ネパール（2月1日）

AFSネパール・コーディネーター
オーム・クリシュナ・タンド
ウカール

ネパールには「ムサジャート」と呼ばれる人々がいます。「ムサ」はネズミを意味し、ネズミを捕まえることを職業としたため、そのような名前がつきました。ネズミを食べるとみなされ、社会の最下層のカースト外として暮らしてきました。戸籍がない人が多く、政府の生活支援が行われても、ムサジャートは対象者に数えられずに除外されることがあります。

カワソティ市ゴリエリアに住む、そのムサジャートの人たちが昨年12月、コロナで休校が続いて勉強ができない子どもたちに補講授業をする寺子屋を開設しました。貧しさゆえにコロナ流行の影響を真っ先に受け、学校を簡単にやめてしまう子どもたちが多い仲間の状況を変えなければ、と考えた有志が立ち上がったのです。

寺子屋で補習授業を受ける子どもたち。ほぼ満席の盛況だ。ネパール、カワソティ市

設が進んでいない自治会館を利用しています。先のロックダウンの後に学校再開したとき、休むことなく通学できるようにと、文具を買えない世帯の子どもたちに有志で文具を提供したことがきっかけになったそうです。

しかし、新学年の授業をほとんど受けていない子どもたちは「学校に行っても授業が理解できないから行きたくない」と話していました。それを親たちが聞きつけ、そんな子どもたちから退学者を出さないように勉強を教えよう、と始めたそうです。

回を重ねるにつれ、寺子屋のことを知った子どもたちが「私も」「僕も」と増え、参加者が今では約150人。ムサジャートでない子どもも混じっています。

ムサジャート以外の子どもを受け入れるか否かも、話し合ったそうです。寺子屋のまとめ役の一人であるラジャニさんが話してくれました。

「以前のロックダウンの際にJAFSから食料を支援してもらえたのは、私たち以外の民族の人々がJAFSとつないでくれたからではないか。寺子屋に來たいという子がいるなら、誰でも受け入れよう。それが地域全体への恩返しになる。私たちの民族が発展するために必要なことだ。そう決めて、今のような大所帯になりました」

寺子屋は屋根がなく吹きさらしで、机・椅子もない中で開かれていました

たちのほとんどが就学した経験がないため、「嫌ならやめて働いたらいいよ」と言って、子どもたちを学校から引き離してしまうのです。ところが今回、これとまったく逆のことが、しかも、前回のロックダウン時に食料支援をした、貧しい人々が多く住む地域で起きたわけです。

私たちの国では法律上、カースト制度は禁止されていますが、生活の中には残っています。根強い差別や民族ごとの境界はまだあります。しかし、コロナ禍の下で、支え合い助け合う心が人々の間に生まれ、それがボーダレスな社会を実現する一歩へとつながっているように感じるがあります。

が、カトマンズでビルを経営している人が、コロナで夜逃げした塾の机と椅子を「売り払おうと思っていたけれど、こんなに頑張っている人たちがいるなら、役立ててくれたらいいよ」と寄贈してくれました。

学校が休校になる程度で、今のところは平時と近い日常を送れています。しかし、休校は子どもたちに大きな影響を及ぼしています。学校に来ることであった子どもたちが、離脱してしまうことが多いのです。特にその割合が高いのが、貧困層の子どもたちです。親

農民や漁師と仕事づくり

インドネシア（2月15日）

AFS北スラウェシ代表

ジミー・ポントー

スラウェシ島の北スラウェシ州での



新型コロナウイルス感染状況は、最近2カ月はかなり改善されています。さまざまな経済活動も再開し、子どもたちも厳しい健康管理しながら、学校へ行けるようになりました。

政府は、ワクチン接種をずっと呼びかけ続けています。6歳から11歳の子どもたちのワクチン接種や、大人向けに3度目の接種を始めました。

1月末時点では、オミクロン株が新たに増えてきたため、コロナ感染者は再び増加傾向にあります。2月上旬、北スラウェシの地方政府は、感染拡大を抑えるために、検疫や隔離の対策を厳しくしました。

私は昨年、コロナ禍で仕事を失った地域の人々が新たな仕事を見つけられるように、農民や漁師との仲間づくりをしています。写真、右手前が私。子どもたちへの教育支援はできて

いますが、コロナの影響で活動資金の調達が困難となり、また移動も制限されたため、離島での植林や海岸清掃などは実施できていない状態です。

オミクロン感染 州政府が防止策

●インド（2月9日）

BSVIA理事

ナンディーニ・クンパール

カルナータカ州政府は、オミクロン株によるパンデミック第3波と思われるコロナ感染者増加に対し、2週間の週末ロックダウンと夜間外出禁止令（21時～翌朝5時）を発表し、拡大を封じ込めようとしています。ロックダウンの間でも、食糧・牛乳・薬・野菜などの必需品を売る店は営業を許されます。ホテルのレストランではテイクアウトのみ認められます。

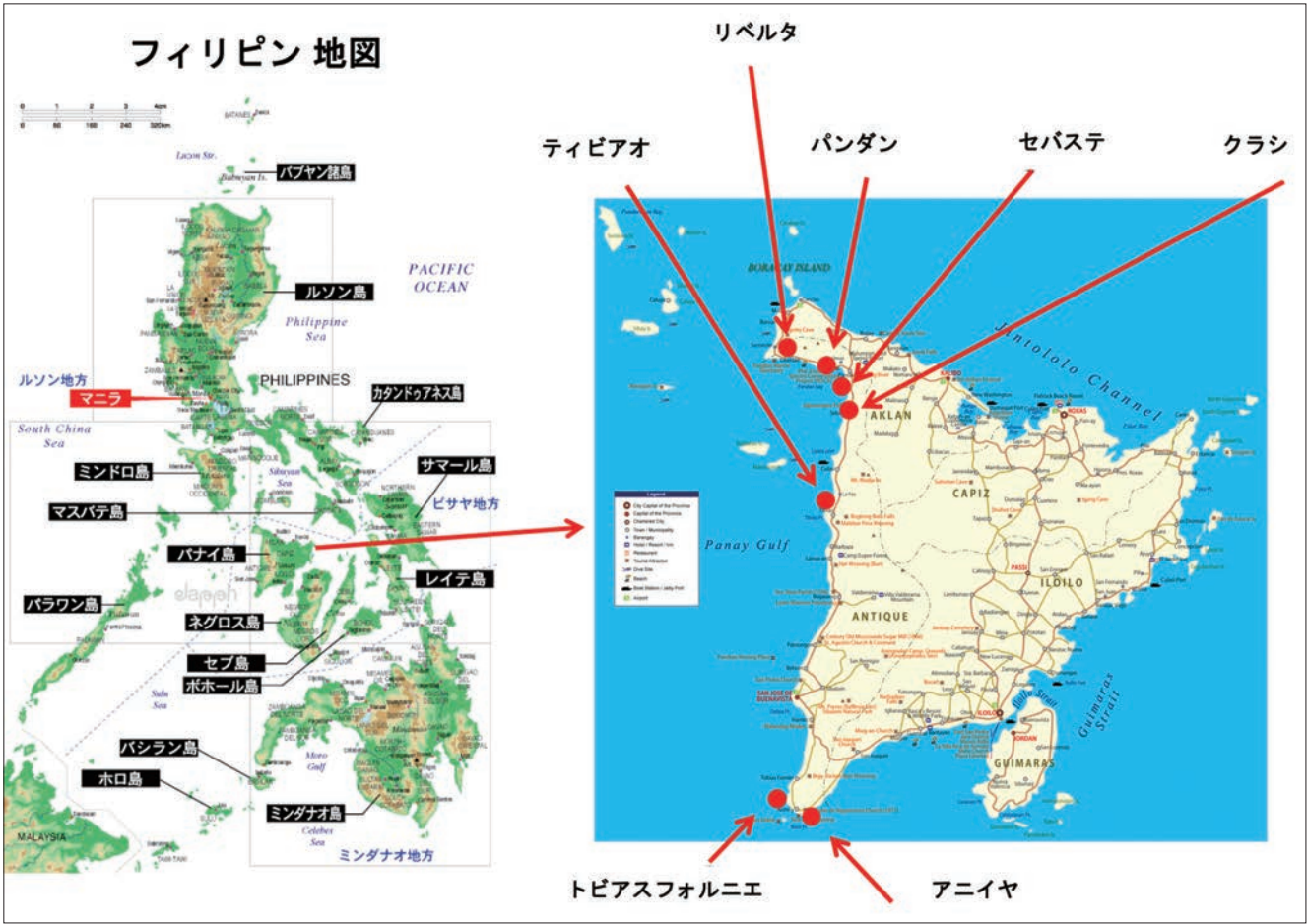
人の集まりも制限しました。大みそから新年にかけても、お祝い行事を始め、あらゆる種類の集まりや文化イベントが禁止されましたが、今回も、レストラン・バー、公共交通機関は、入場者数は定員の半分にするように求めています。結婚式などの儀式は、屋外の会場で200人、屋内で100人まで参加でき、ゲストには2回のワクチン接種が求められます。宗教の礼拝所は開いていますが、入場者は50人以下に抑える必要があります。

学校は、10・11・12年生を除き、小・中学校と高校を2週間閉鎖することと決定しました。

州都バンガロールは、第1波・2波と同様に今回も、海外からの乗客が到着する空港があるために、感染拡大の震源地となっています。また、マハラシュトラ州、ケララ州、ゴア州からカルナータカ州に入る人に対しては、PCR検査の陰性証明が必須とされています。



フィリピン襲った台風ライ 日比連携して被災者支援



支援の対象者（パナイ島アンティーク州）		
支援地	緊急支援物資配布	家屋倒壊世帯への支援
アニヤ	100世帯	15世帯
トビアスフォルニエ	100世帯	15世帯
ティビアオ	50世帯	—
クラシ	50世帯	—
セバステ	50世帯	10世帯
リベルタ	100世帯	—
パンダン	100世帯	10世帯
合計	550世帯	50世帯
緊急支援物資：米・缶詰・乾麺・飲料・調味料等の食料品・毛布・ライト・衛生用品など 家屋倒壊世帯への支援：シート・屋根材・合板など		

家族が生き残ったのが何よりの救いだ、屋根や壁が吹き飛び、雨がしのげない＝12月19日、フィリピン、パナイ島アンティーク州

今に生きた！ パンダン水道建設のネットワーク

本当に必要か調べ配布

支援対象者は、市（町）の災害リスク軽減管理責任者が報告された中から相談によって選び、地区の監督者が直接調べ、村長の助けを借りて、本当に助けが必要であるかどうか確認しました。

ん。私たちは感染防止のためのルールを守りながら、検査と消毒、予防を徹底し、支援計画を練っていきました。支援活動の呼びかけに、AFSメンバーに加え、教育省、フィリピン海軍予備軍、地域のNPOが協力してくれ、共に活動できました。

AFSアンティーク代表
ジェネロッサ・コンデス

パナイ島に大きな被害

2021年12月16日～18日、大型台風22号（国際名・ライ、フィリピン名・オデット）がフィリピン中南部を横断し、240万人を超える人々が被災しました。シアルガオ島、セブ島、ボホール島、パナイ島の被害が特に大きく、コロナ感染拡大が収まらない中で交通・電気・水へのアクセスが寸断され、多くの被災者が非常に困難な生活を余儀なくされました。JAFS提携団体であるAFSパンダンとAFSサウスアンティークは連携し、パナイ島アンティーク州の、特に被害が大きかった海沿いの地域を対象に、支援活動を行いました。

漁村や農村では、竹やニッパヤシで造った家に住む貧しい人が多く、強い台風が直撃すると、屋根や家財が飛ばされてしまいます。私たちは、学校や村の中で一番助けを必要としている人々を調べるとともに、被害が少なかった人々には、物資提供や募金を呼びかけました。パンダン水道パイプライン事業から始まり、長年にわたって培ってきたボランティアの経験とネットワークを通じて、多くの人々が賛同し、支援の輪を広げてくれました。

まだまだ、コロナが広がらないように細心の注意を払わなければなりません。

た。多くの被災者の中から支援対象者を選んでいくことはとても難しく、きめ細やかな対応が必要とされます。

被災地では電気が止まり、電話やインターネットも使えない状況が続いていました。コロナの脅威もある中で、各地域の教育省と災害リスク軽減管理者が現実に即した情報を寄せてくれ、支援活動を大きく助けてくれました。

支援物資は、学校の屋根付き体育館で、被災家族に直接渡すこととなりました。関わったすべての人が、コロナ流行で大変な状況の中でも非常に協力的で、皆で厳格な感染防止の規定を守り、実践してくれました。とても嬉しく、安全な活動ができたことに、心より感謝しています。

支援のための移動や物資輸送には、フィリピン海軍予備軍が活躍しました。私も予備軍メンバーです。職業軍人ではありませんが定期的に訓練や研修を受けており、人道的使命を帯びた活動が必要とされる際に出動します。

今回は屈強な23人のメンバーが、安全な道路へのアクセスや重い物資の輸送、コロナ感染防止をしながらの効果的かつ効率的な支援遂行に、大いに力を貸してくれました。フィリピンではコロナのために、村々への移動が厳しく制限されています。通常、複数の村への移動には申請が必要で、時間もかかります。海軍予備軍の制服を着た私たちは、感染防止規定を厳守している

学校の教室を借りてボランティアの手で支援物資セットをつくり（左上）、コロナ感染対策を厳守して被災者に直接手渡した（下）＝フィリピン、パナイ島アンティーケ州パンダン町



メンバーとして自由に移動でき、より早い支援活動を可能にしました。

声をかけ励ましながら

支援活動の中で、被災者が家や生活

の糧、衣服、家財を失った状況を目の当たりにし、彼らの話を聞いたことは、忘れられないとても悲しいことでした。本当に限られた短い時間でしたが、できるだけ被災者一人一人に声を

かけ、心に寄り添うよう努めました。被災者は失意の中、これからの生活に不安が募るばかりでしたが、JAFSを通じて日本の方々の温かい支援が届けられたことに涙を流して感謝し、力づけられていました。

今回、支援の対象に選ばれたのは、被災後、どこからも支援を受けることができず取り残された人々です。台風後の彼らの状況は、想像を絶するほどひどいものだったのでしょうか。彼らの村は町の中心部から遠く離れており、支援を求めることも受けることもできていませんでした。

最も弱く困窮している人々、何も特権を持たない人々、そして忘れられている人々が、多くの方の善意により、ようやく支援を受け、自身で立ち上がって生活を始める気持ちを持ち始めることができました。

JAFSの皆さんが、日本もコロナで大変な状況にあるにもかかわらず、募金にご協力くださったこと、本当にありがとうございます。私たちの地域でも、学校の教師や子どもたち、関係者が募金を呼びかけ、約20万ペソ（約45万円）もの協力を得ることができました。AFSのネットワークを生かし、被災者の人道的な生活のために連帯して活動できたことに、心より御礼申し上げます。引き続き、被災者のこれからの生活にも寄り添って、支援活動したいと思います。

教えられた人付き合いの大切さ

●ネパール駐在記 坂口 優（JAFSスタッフ）

JAFSの揚水事業が進むネパールへ、前任者から引き継いで赴任して、2月で2カ月が経ちました。来てすぐに感じたことがあります。それは「ネパール人は人付き合いをとても大切にしている」ということです。

人々は、近所の人との会話、八百屋での会話、お店での会話など、日常生活のあらゆる場面で様々な人との会話、人間関係を大切にしています。

「didi（ディディ＝お姉さん）」「didi（ダイ＝お兄さん）」と呼んで、必ずと言っていいほど初めに聞く「ご飯食べた？」から、何気ない会話が始まります。「ご飯食べた？」は「元気ですか？」の代わりのあいさつのように使われています。知らない人同士でも、ちょっとした会話をもち、コミュニケーションをとっても重視しています。

日本でも、地方では近所付き合いや人付き合いを大切にしていますが、都市部では、その大切さが忘れられているのではないのでしょうか。忙しいあまり、人付き合いやコミュニケーション

支援校を訪問して、子どもたちから大歓迎を受けた。左が筆者。1月3日、ネパール、ガンダギ州ナワルプル郡カワソティ市ピトゥリ、スリーサンティ小学校

が薄れているような気がします。それを私に気づかせてくれたのが、ネパールでの生活です。

日々多くの仕事に追われているのは皆同じです。その中でいかに人とのコミュニケーションを大切にするかで、心のゆとりが変わってくるのではないのでしょうか。

話は変わり、ネパールでも再びコロナ感染状況が悪化しています。現在流行中のオミクロン株が、じわじわと拡大しつつあります。

私が滞在している家の人もコロナに感染しました。AFSネパールのスタッフも1名、感染が判明しました。日々マスク着用や手洗い、うがいを入念にしているにも感染します。いつ、どこで、誰が感染するか分かりません。

日本でもオミクロン株が大流行していますが、国が違っても、基本的に取り組むべき感染予防対策は同じでしょう。日本とネパール、近いようで遠く、知らないことも多いかもしれませんが、大切にすべきことは共通していると思います。

人間関係の大切さやコロナ感染に対して、今一度原点に戻り、基本を忘れず行動することが重要だと、再度気づくことができました。



学校菜園のフェンス用に竹を譲ってもらった子どもたちが積極的に課外活動に取り組んでいる。ネパール、カワソティ市ピトゥリ

中学校で学ぶ生徒たち。経済が急速に成長し、就職にはより高度な学力が求められるようになってきた。バングラデシュ、ダッカ



◀ アジアの教育現場から支援の要請 ▶

ネパール、ガンダギ州ナワルプー
ル郡カワソティ市ピトゥリにあるス
リーサントイ小学校の校長を、今年
から引き受けています。私たちの学
校で最近取り組み始めたことがあり
ます。フェイスブックを活用して学
校の様子を伝えることです。

私たちの学校は、行政統合によっ
てカワソティ市に属するようになり
ました。市内でもへき地にある小
さい学校です。コロナで外との交流が
できづらくなり、休校した時期もあ
りましたが、荒れてしまった学校を
残念に感じた児童たちが、これまで
以上に課外活動に進んで取り組むよ
うになった姿を、多くの人たちに
見てもらいたいと考えたからです。

先日は近くで竹を譲ってもらい、
学校菜園のフェンスを皆で作しまし
た。私たちの学校は1993年か
ら、地域で初めて給食を実施しまし
た。給食当番、掃除当番制を取り入
れ、それまでどの学校も児童たちが
していなかった学校生活のさまざま
な活動を、JAFSの助けを借り、
児童の手で行うことにしました。

子どもに掃除をさせるのかと親か
ら怒られることもありましたが、活
動は高学年の児童から低学年の児童

に引き継がれました。今ではそれが
当たり前となり、子どもたち自身の
学校生活に根付きました。児童たち
自身が、自分たちの活動によって学
校が良くなっていくことを実感し、
自信となったのです。うれしいこと
に、児童たちはこれで十分と思って
終わることなく、学校のため、そし
て地域のためにも、できる活動に取
り組んでいます。

少し前から、この郡では全ての学
校で、英国文化振興会が推奨する活
動が進められるようになりました。
しかし、そのほとんどが、すでにJ
AFSからアイデアをもらって取り
組んできた内容でした。小さな学校
であっても児童、教師、親を含む地
域の人たちが連携すれば、児童の力
を引き出すことができることを、長
年の活動で証明できたと思います。

日本の皆さんとのつながりが、大
きな勇気を与えてくれています。

今、私には大きな課題がありま
す。95年に建設された最初の校舎
が、老朽化により建て直しを余儀な
くされています。できれば、これま
で私たちを応援くださったJAFS
の仲間の皆さんに再建にご協力を
いただき、コロナが終わった後は、
学校で交流会をできることを願っ
ています。

(スリーサントイ小学校長
イッショリ・ブサル)

バングラデシュは、2021年の
所得国化実現に向けて、経済成長
の加速化を目指してきました。20
21年度の一人当たりGDP(国内総
生産)は初めて2000ドルを超え、
年経済成長率5・5%と発表される
成長を遂げています。

しかし一方、貧困レベルでの生活
から抜け出せない人たちが2割程度
いることも事実です。

JAFSの現地提携団体であ
るBDP (Basic Development
Partners) は、設立目的である貧困
層の子どもたちの教育推進を目指し
て活動してきました。移り変わる国
家の中で自分たちの役割をどのよう
に考えているのかを聞きました。

◇
BDP設立者のマラル親子から
代表を引き継ぎましたゴメスです。私
はBDPの活動を通し、バングラデ
シュの一人でも多くの子どもたちに
教育の機会づくりができてすることに
誇りを持っています。

BDPは、設立時から一貫して、
国内でも定職を持たない低所得者が
多い地域で、家の手伝いや家計を助
けるための仕事を余儀なくされてい
る子どもたちを支援してきました。

彼らが離脱することなく学習し、1
学年でも多く修了できることを目指
した学校を作り、中学校・高校への
進学を促してきました。

JAFSの教育里親の方々には、
その中学校に進学した子どもたちが
経済的な理由で辞めることなく4年
間学び、卒業できるように、ご支援
いただきました。多くの子どもたち
が、その恩恵を受けています。

国が経済成長した今、2割の貧困
層の人たちが取り残されることがな
いよう導くには、教育の重要性はさ
らに増すと考えます。

中学校を卒業しただけでは、定職
に就けない場合が多く見られるよう
になってきました。高校卒業、そし
てできるなら大学に進学して学士号
を得ることにより、ようやく社会の
中で自分の役割を見つけることがで
きます。

我々BDPとしては、できるだけ
多くの子どもたちが高等教育を受け
ることにより、社会の中で独り立ち
できるようなサポートをしていきたく
いと考えています。それが貧困層の
削減に大きくつながっていくに違い
ありません。

バングラデシュの現状をご理解い
ただき、私たちの新しいチャレンジ
にお力をお貸しください。
(BDP代表 アンブローゼ・ゴメス)

アジアの子どもたちを

支え励まし30年

JAFS自主活動グループハルハロの歩み

ランチ楽しみながら学ぶ

「ハルハロ」は、フィリピンのストリートチルドレンが劣悪な環境におかれている状況を知った仲間が、自分たちで何かできないかと模索を重ね、1991年に立ち上げたJAFSの自主活動グループです。

生まれながらに貧しい生活を余儀なくされて育った子どもたちの明るい未来のために、物品も必要ではあるが、教育がいちばん大切と考え、支援目的を教育にしました。息の長い活動を目指してスタートしました。ハルハロは、フィリピンのデザートの名前です。多様性を尊重するフィリピンの文化も示し、活動にふさわしい名前になりました。

最初の主な活動は、毎週金曜日にした「Fランチ」でした。国際協力活動

ハルハロを支えてきた主なメンバー

の前提として、異文化を知り理解を深めるため、国内外のゲストにボランティアでお話しいただきました。

新たに知った多様な世界にワクワクしながら、腕自慢のシェフがつくる美味しい料理やデザートに舌鼓を打ち、1000円の参加費と食料費の差額で、子どもたちを支援しました。多くの方々のご協力を得て、2014年の活動終了時には回数が875回に至りました。

ハルハロの子ども支援活動は、ご縁のあった教会などを通して、ストリートチルドレン支援から始まりました。92年からネパールのラリット福祉センターを支援しました。ボランティアでそこに在職していたハルハロの仲間が、質の高い教育をするには教師の給料が必要と依頼を受けました。学校や先生と交流が深まり、子どもたちの様子が伝えられ、ハルハロのメンバーが訪問したりして、相手の見える活動が

できました。先生方の努力もあり、ネパールで教師研修会を開催するまでになりました。

インドのコスモニケタン学園とは、学校設立後の98年から運営支援に関わりました。設立に尽力された故クンパール氏がFランチのゲストで来てくださり、教育の大切さを語られたことが印象深く残っています。2002年から6人の里子支援を始めました。ハルハロの活動が充実してきて、遠くから通う子どもたちのためのスクールバスを寄付することもできました。

そしてフィリピンでは、94年にミナダナオ島のストリートチルドレン・ケアセンターの支援。04年からはマニラのアジア社会科学院（ASI）の教育プログラムにより、マニラ鉄道沿いに暮らす家族の子どもたちの支援。08年からは、マニラを追われて50km離れたバリランに移り住んだ子ども6人の里子支援を始めました。

里子支援した12人の子どもたちは、学校へ行くことで将来の夢を持ち、勉強に励む様子が伝えられてきました。子どもたちの夢がかなうことを願って励んできましたが、最後に支援したバリランの里子2人の高校卒業を機に、ハルハロの活動は終了するはずでした。

進学相談受けて活動再開

ところが、ASI副学長デニス氏が

ら、支援を終えた元里子マリーアンの大学進学相談を受けました。

今も厳しい生活環境の中で暮らしている彼女は、小学生のときに母親が遺した言葉「貧しさから抜け出るために一生懸命に勉強しなさい」を心の支えに勉強に励み、優秀な成績で高校を卒業することができました。彼女は勉強だけでなく、小さい子の面倒をよく見て、「地域のリーダー的な存在の活発な子ども」と成長記録にありました。

彼女の夢がかなえられるように、ハルハロは活動を再開しました。

現在公立の大学に入学した彼女は、コロナ禍で対面授業が受けられない中、生活の厳しさも続いています。ハルハロでは成長したマリーアンに時折オンラインで会いながら、地域の子どものたちの希望の星でいてくれることを願って励まし続けています。

（JAFS会員 橋本 末子）

信頼と絆は今もお健在

ハルハロの料理担当だった私は、毎回、料理がいかに多くの参加者に喜んでもらえるか、またリピーターが増えるかを常に考えていたような気がします。約30年間続けてこられたのも、ハルハロメンバーの、アジアの子どもたちへの熱い思いがあったからだと思います。

「現地を訪れて子どもたちと直接会って現況を知る」。それが一番の近道

マリーアン・マカララッド(21歳)



大学で学ぶ夢かなえてくださった支援に感謝

だったと思います。ハルハロもいったんはやめたものの、「元里子の一人が大学に行きたがっている」と聞いた私たちメンバーは、自分たちが活動当初より30歳も年老いていることを忘れ、すぐに再開を決めました。

スタッフ同士の信頼関係、そして子どもの教育のためならまた頑張ろうというメンバーの温かい気持ちと強い絆は、今もお健在です。

海外に向けてボランティアをしてきたのですが、国内の活動がメンバーの住んでいます。兄は私たちが食べるため、住まいを借りるために働いてくれています。

私は勉強を続けていいか兄に相談しました。兄はできる限りのことをしたかったのですが、毎日一生懸命働いても、収入は私たちが食べて生きていくための支出で消えてしまっています。でも私は、勉強を決してあきらめたくはありませんでした。

私の気持ちを知った祖母は、ASIスタッフで、JAFSの子ども支援プログラムを推進したニューベイスンと話す機会を作ってくれました。私の夢と、家族の経済的限界について話すと、彼女はASI内で相談し、JAFSに私の希望を伝えてくれました。

幸い願いは認められました。勉強を続ける機会を与えてくれたハルハロの皆さまに心より感謝しています。自身と家族の生活をより良くするため、大学で「人材開発と経営学」を学ぶという夢を実現するうえで、非常に大きな助けになります。

私は今まで多くのことをあきらめざるを得ませんでした。ハルハロからの奨学金により、人生について前向きな考えと楽観的な見方をする事ができるようになりました。私の勉強をずっと支えてくれる方々がいることが、大きな刺激となり、今まで以上に勉強に真剣に取り組んでいます。

現在の目標と夢の一つは、大学を卒業して良い仕事につき、自分や家族のためだけでなく、特に両親が亡くなったから私たちを世話してくれた祖母を助けることです。また、ASIの子ども支援プログラムに参加して好きになった歌うことを続けていき、有名な歌手になりたいです。料理も好きなので、シェフになって自分のレストランをつくる夢もあります。

ハルハロとJAFSによって、勉強を続ける素晴らしい機会を与えてくださったことに心から感謝します。言葉だけでは言い尽くせませんが、私のために貴重な時間を使って支えてくださった方々にお礼申し上げます。

基本的な衛生環境が改善

カンボジアの経済状況は、都市部を中心に向上していますが、新型コロナ感染症の影響もあり、農村部では基本的なインフラもまだまだ不足している地域が多く存在します。基本的な生活条件を整備することが、教育や生活が向上していくには欠かせません。その一つの例が、井戸です。この地域の村人は、主に風邪や熱、下痢で悩まされています。支援により井戸ができ、安全な水を確保できるようになったことで、衛生環境や健康状態を向上、改善することができるようになりました。



【寄贈者】徳島県立脇町高等学校様

タケオ州トレアン郡ロネナム地区ソフィ村
受益者…7世帯24人
井戸の形式…露天式（深さ22m）

【寄贈者】仁愛会様

タケオ州トレアン郡ロネナム地区セメイ村
受益者…7世帯39人
井戸の形式…露天式（深さ22m）



下痢の心配がない安心な水

新しい井戸が完成する以前は、村人は約1900m離れた寺の池の水を家庭用の水としてくみに行き、日々の飲料水として利用していました。飲料水として飲む際は、水を一度沸騰させて利用するようにしていましたが、使う生活用水全般が衛生的でないためか、村人は主に、風邪や熱、下痢で悩まされてきました。ご寄贈いただいた井戸のおかげで安全な水を確保できるようになったことで、村人たちが安心して健康的な生活を送ることができるようになりました。

遠くの池より近くの井戸

村人は基本的に農業で生計を立てています。新しい井戸が完成する前は、約550m離れた寺の池の水を使っていました。しかし、その水は動物も利用しているため、衛生状態はよくありません。村人の多くが、寺の池まで自転車で家庭用の水をくみに行き、日々の飲料水として飲む際は沸騰させてから使っていました。水くみは、父親と母親、そして息子の仕事でした。井戸ができたことで、安全な水が近くで容易に手に入るようになり、心から感謝しています。



【寄贈者】小川 富・小川 勢津子様

タケオ州トレアン郡クバブ地区ドゥンプー村
受益者…10世帯51人
井戸の形式…露天式（深さ36m）

いのち
生命の水 うるおす未来
ご寄付には
税の優遇措置が
受けられます

いのち 生命の水 うるおす未来

井戸の寄贈にご協力ください。あなたの力がアジアの人々の命を助けます。ご寄贈者に完成報告書、写真、パネル写真を届け、現地の井戸に、ご寄贈者のネームプレートを設置します。

■井戸1基の建設に必要な費用■（2018年4月現在）

インド=60万円 フィリピン=33万円
カンボジア=28万円 スリランカ=22万円
ネパール=17万円（パイプライン=25～150万円）
バングラデシュ=浅井戸22万円、深井戸55万円

※5年間のメンテナンス費、現地管理費を含む概算です。※現地資材費高騰により費用を1割増に変更させていただきます。ご理解ご協力をお願いいたします。

■お振込み先■ ・郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会
・三菱UFJ銀行大阪中央支店 普通1968711 公益社団法人アジア協会アジア友の会

水くみから解放され女子の成績向上

村には飲料水の問題、衛生問題、健康問題など多くの問題がありますが、最大の問題である飲料水については、この井戸の完成によって大きく解決されました。

伝統的・文化的に母親の家事を手伝う役割を担ってきた女の子たちは、早起きして水がたまっている場所を見つけなければなりませんでした。井戸が完成したおかげで、その仕事から解放されました。今後の女子の成績は、男子と学習時間が平等になったので、向上すると期待しています。



【寄贈者】河野直子様

カルナータカ州ビジャプール県インゲールシュワール村 受益者約600世帯約4000人
井戸の形式…ポンプ式（深さ137m）

【寄贈者】新保崇浩様

ネトローコーナ県ネトローコーナサダール郡スワリカン
ダ村ネトローコーナBDPオフィス 受益者111世帯
670人 井戸の形式…ポンプ式深さ290m



職員・村人・生徒に安全な水

この地区には川が流れていますが、モンスーンの時期はあふれ、それ以外の時期は水位が下がってよどみ、水は暗褐色になってしまいます。

この深井戸は、現地提携団体BDPのオフィスの主水源として設置されましたが、安全な飲料水を必要としている近隣の村人や遠方の人々にとっても1年中アクセスが容易です。村人のほか、スワリカンBDP学校の生徒たちも、新しく設置されたこの井戸から安全な飲料水を簡単に入手できるようになりました。

乾季も水が得られ生活が楽に

井戸が完成する前は、村人は約2km離れた寺の池まで水くみに行っていました。この水は動物も利用するため、衛生的ではありません。村人の多くは、沸騰していない水を飲むため、下痢などに悩まされていました。また、水を得るために多くの苦労がありました。村人のほとんどは、家庭用の水くみを1日に2～3回しますが、乾季後半の3月から5月には池は乾燥し、水が干上がってしまいます。村に井戸ができて、本当に生活が楽になりました。



【寄贈者】花巻北ロータリークラブ様

タケオ州トレアン郡ロネアム地区ソフィ村
受益者…15世帯63人
井戸の形式…露天式（深さ21m）

しっかり管理し大切に使います

ドゥンブー村の人口は、1622人291世帯です。村人は農業で基本的生計を立てています。同時に、収入を増やすためにパーム糖作りもしています。

新しい井戸が完成する以前は、村人は約750m離れた寺の池まで自転車で行き、この衛生状態の良い水を家庭用に使っていました。村人の多くは、この水を煮沸して日々の飲料水として利用していました。新しくできた井戸は、村人がしっかり管理して大切に使っていきます。ありがとうございました。



タケオ州トレアン郡クバブ地区ドゥンブー村
受益者…8世帯38人
井戸の形式…露天式（深さ35m）

安全な生活用水が得られた

村人は農業で基本的生計を立て、収入を増やすため、パーム糖作りやアヒルの飼育もしています。村ではほぼ全員が古いトイレを利用していますが、一部の人は近くの森でトイレを済ましてしまいます。村人は馬を引いて水を買に行ったり、1日に2～3回、歩いて池まで水くみに行っていました。皆が沸騰した水を飲んでいても、健康をあまり気にしていません。新しい井戸のおかげで、安全な飲料水や生活用水を得られるようになりました。



【寄贈者】内海俊栄様

タケオ州トレアン郡プレイスルック地区プレイスルック村
受益者…9世帯53人
井戸の形式…露天式（深さ21m）

井戸ができた村

干ばつ時も心配せず農業ができる 【寄贈者】株式会社グローアップ様

ご支援により、干ばつ時も心配せずに水を得られる井戸が完成しました。飲み水や生活用水が村の中で得られるのは、大きな喜びです。近隣から村に来る農業者も、今までは雨水に頼っていましたが、雨が降らない時期には井戸水を使うことで、継続して農業に取り組めるようになりました。多数の村人が水を使えるように専門家と相談した結果、直径12mの大きな井戸となりました。建設には多くの村人が協力し、井戸の周りのプラットフォームや井戸への道も整備されました。



東部州アンパーラ県ウハナ地区ボッカベラ村
受益者…住民30世帯と農業者計175人
井戸形式…露天式（深さ12m）

民族や宗教を超えて井戸管理

村の人たちは長年、農業用水だけでなく生活用水を得るためにとても苦勞してきました。井戸が完成し、干ばつ時にも心配せずに水を得られるだけでなく、水質検査では飲料水として適切であり、子どもからお年寄りまで安心して飲める水であると分かりました。この村には民族や宗教の違う様々な人が住んでいますが、井戸ができてからは共に管理や清掃を行うようになり、今まで以上に親しく協力し合える関係に変わり、村全体の雰囲気もより明るくなりました。

【寄贈者】富永信明様

ウバ州バドゥッラ県タワラムテナ村
受益者…54世帯258人
井戸の形式…露天式（深さ8m）



手洗い指導で衛生意識が向上

【寄贈者】ファンシープランニング様

この村はスリランカの中で乾燥の厳しい地域にあり、村人たちは、生きるための水を得るのがとても難しい状況に置かれていました。井戸が寄贈され安全な水が使えるようになり、毎日の飲み水や生活用水、農業用水の不安がなくなりました。さらに、スリランカでは農村部のコロナ感染拡大が深刻な状況にありますが、井戸ができたことで、健康指導や手洗いなどの衛生指導も実施されるようになり、村人の衛生についての意識が変わり、人々の生活が大きく改善されてきています。



東部州 アンパーラ県 アンパーラ郡マレガマ村
受益者：25世帯148人 井戸形式：露天式（深さ8m）

井戸ができた村

続ける大切さと成果を確認

東日本大震災10年後の復興支援地を巡る



パナソニックグループ労働組合連合会（PGU）とJAFSが連携して2014年から19年まで計7回実施した東日本大震災復興支援スタディツアーの総括として2021年12月2・3両日、これまでの訪問先をPGUの鈴木克典副中央執行委員長、澤田茂中央執行委員とともに訪れ、復興支援事業の状況などを確認した。

（JAFSスタッフ 柿島 裕）

植えた木々が元気に根づく

JAFSは、震災直後から、宮城県南三陸町歌津地区で物資提供や炊き出しなどさまざまな活動をし、12年には南三陸直売所みなさん館を設営し、自立に向けた支援もしてきた。

当会法人会員であるPGUは、13年度から被災地を訪れ、地域をサポートする取り組みをしており、JAFSが連携して1泊2日の復興支援スタディツアーを行ってきた。計7回のツアーに延べ225名の組合員が参加した。

残念ながら、20・21年はコロナ拡大防止のため中止となったが、震災10年目の節目として、これまでのツアーを総括する視察をした。訪れたのは、宮城県名取市・石巻市・南三陸町の、こ

れまでに植樹をしたり訪問した場所である上²の地図。

植樹は、環境整備を目的に、名取市高柳町集会所、石巻市上釜地区（現在は誓いと伝承公園）、南三陸町海の見える命の森の3カ所で行った。いずれも植樹記念プレートが無事現存しており、周辺整備が進んできれいな公園になっている。

19年に完成した名取市震災メモリアル公園・震災復興伝承館、絵灯籠差替ボランティアを行ったパナソニック仙台工場、津波で大きな被害を受けたながらも多くの被災者を受け入れた南三陸ホテル観洋も訪問した。

「とにかく逃げて」語り部切々

同ホテルでは、海の見える命の森の

販売をしている。

助かった命を支え合いたい

石巻市釜石地区の北上川河口から約4kmに位置する震災遺構大川小学校では、川を遡上した8・6mもの津波で校庭にいた児童78名中74名、教職員10名が犠牲になった。現在は大川震災伝承館が建てられ、当時の状況などが展示されている。

大川伝承の会の語り部三條すみゑさんにお話を伺った。学校側の判断ミスで助かるはずの命が失われた。遺族と学校・行政との間で国家賠償責任訴訟が行われ、19年に最高裁が学校・行政の賠償責任を認めた判決は記憶に新しい。確かに現場を見ると、すぐ裏に避難できる山があるにも関わらず、なぜ逃げなかったのかという素朴な疑問が起る。さらに、助かった子どもも「あの大川小学校の」と言われていじめられたりしたという。どうして助かった命を温かい気持ちで支え合おうとしないのだろうかとても悲しく辛い気持ちになった。

語り部は肉親を亡くした方が多い。自分が感じたぬぐいようもない悲しみを一人でも多くの人が感じずにすむよう、助かった命をお互いが支え合うよう、心から願って語り続けている。

なお、JAFSは今後とも、PGUの社会貢献活動と連携していきたいと願っている。



JAFSが設立支援し、14年からツアーで訪れてきた南三陸直売所みなさん館。12月3日、宮城県南三陸町



ツアーで植樹した木々が定着し育っていた。12月2日、宮城県石巻市上釜地区の誓いと伝承公園



バスツアーで震災の脅威を訴える、南三陸ホテル観洋の語り部・伊藤俊さん。12月3日、宮城県南三陸町

植樹もしており、12年からは震災を風化させないための語り部バスを年中無休で運行している。

今回は、ホテル社員で訪問2カ月前に南三陸議員に初当選した伊藤俊さんが案内してくれた。伊藤さんは、奇的に助かったお嬢さんがいることも

あり、命の大切さ、とにかく逃げることの大切さを切々と語った。

南三陸町旧防災対策庁舎は、屋上に避難した職員53名中43名が15mもの津波で亡くなったところだ。最後まで一人でも多くの職員を救おうと懸命な救助活動を行って命を落とした人たちの

写真が遺されており、涙なしには見られなかった。

JAFSが支援して12年にオープンした南三陸直売所みなさん館は、現在も引き継いだ職員が運営し、南三陸地域の農産物や海産物、お弁当やお惣菜、お菓子、味噌、漬物などの製造・



国内外のさまざまなイベントをHPに載せています。記事についてのお問い合わせはJAFSへ＝裏表紙にアドレス、連絡先



コロナ禍ニモ負ケズ…… アジ・フェス130人が交流

アジアの人々との相互理解と交流を目指す第6回アジア・チャリティ・フェスティバルをコロナ禍の中、昨年12月12日、大阪国際交流センターで開催しました。行政から厳しい規制などがありましたが、まずは、事故もなく無事に終了できました。

参加者は130名（うち留学生30名）で、前年よりは減りましたが、映画「セカイイチャオイシイ水」の上映会、留学生8名が日本に来て感じたことを語り合ったパネルドイスカッション、日本の伝統芸のアトラクション、留学生を交えての輪投げⅡ写真Ⅱや椅子取りなどの楽しいゲーム大会とビンゴゲーム、10店舗によるアジア雑貨販売など、予定通りの内容で開催でき、困窮するアジアの留学生への支援金10万円も、当初の目的通り達成できました。皆さんと共に喜びとするところであります。

（第6回実行委員長、
JAFS河内長野会長
渡邊 喜久次）

岡山に広げる歌声の輪



昨年9月から縁あって、岡山県備前市の日生町に住むことになりました。元美容室の家は10部屋もあり、その中でも一番大きなお部屋をリフォームしてホールにしました。

まず、この地域に溶け込みたくて、これまで大阪や奈良でやっていた歌声サロンを10月から始めました。始めは2～3人しか来られなかったのですが、そのときのお客様がお客様・お友達にもお声がけしてくださり、1月には、たくさんの方に来て頂きました。

皆様がひっきりなしにリクエストして「あゝ何年ぶりかなあ、こんなに大きな声で歌ったのは」と言われ、たいそう楽しんで頂けました。JAFSの新人会員になって下さったり、募金箱に入れて下さったりし、私たちもうれしさでいっぱいになりました。これか

らも人の輪を広げ、いろんなイベントをしたいと思っています。

（岡山県備前市
日生地区会会長 鳥居 建十）

オンラインでワンフェスユース

高校生の国際協力／SDGs／多文化共生のアクションの最初の一步と



なるワンワールドフェスティバルYouth 2021 が12月19日に開かれました。アジアユースサミット（AYS）の活動を発表して理解者を増やす場として、プログラムに参加しました。全くつながりがない人たちによるオンライン開催だったため、交流が思うようにいきませんでした。ですが、高校生が積極的に意見を出してくれ、企画をうまく進めることができました。彼らに次回のAYSに参加し、盛り上げて欲しいと感じました。

私たちはAYSの経験を生かし、一人では思いつかなくても皆の視点で分析し、アイデアを共有して課題を解決することの重要性を伝えることができました。

準備も全てオンラインでしたため、運営との意思疎通や連携がうまくいかなかった点もありましたが、無事終えることができて安堵しています。同時に、対面で開催していたときを、とても恋しく思いました。次回は対面でできることを祈っています。

（AYSユースリーダーチーム
林田 あい、加藤 百華、
深沢 凜子、杉元 あかり）

ネパール報告にワクワク



枚方ティーサロンを1月29日に1年2ヵ月ぶりに開催できました。15名が参加し、JAFSのネパール駐在員だった中島彩華さんから、彼女が関わった揚水事業の現状を聞きました。

事業が順調かつ階段のようにならりと積みあがっている報告を聞くことができました。最近、海外の生の情報を聞く機会が少ないので、とっても新鮮でした。コロナで小さいエリアに居がちになっている中、空間が広がったように感じました。

枚方地区が寄贈した水支援金についても、中島さんが関わった活動で活用され、地域の人々のために近々設置が始まることを知らされました。今現地にいる駐在員の方から完成報告を聴く機会を、次回のティーサロンで持つこ

とができれば、とワクワクしました。

（枚方地区世話代表 天野 由紀代）

里山・プラごみ……

SDGsを考える

SDGsセミナー第2弾が2月17日から始まりました。テーマは「私たちの暮らしから考えるSDGs」。身近なところであることをSDGsから考え、一人一人の行動につなげる機会になればとの願いを込めています。

第1回は「馬を使ったSDGs SATOYAMA」。講師の松川一人さんから「馬を林業や畑の耕作に活用し、糞を堆肥化するなど、日本古来の方法で循環型の里山づくりをする中で、持続可能性を見出し出している。しかし耕しているとプラスチックが土中から出てくるのが頻繁にあり、処理に困っている。菜園でも農業資材にプラスチックを使わないようにしてほしい」とのメッセージを頂きました。

もう一人の講師の北山みな美さんは「いま、プラスチック削減が求められている」と題し、プラスチックの環境と人体への影響について話されました。「プラスチックが他の物質と引く付き、さらなる悪影響が発生する。日ごろの処理方法に気を付けてほしい」とのメッセージをもらいました。

（JAFSスタッフ 熱田 典子）

新入会員ご紹介

ご入会感謝申し上げます。（敬称略・50音順）
2021年12月1日～2022年2月28日

●社員会員
コリアンワールド代表李相善

●維持会員
在間緑／小野塚操／斉藤保／橋田政子

●賛助会員
高橋文子／小笠原良二／中村隆

会費納入者、寄付・物品協力者

温かいご支援ありがとうございます。（敬称略・50音順）
2021年12月1日～2022年2月28日
なお夏季・冬季募金へご協力くださった方につきましては、
1年後の夏季・冬季に別紙で報告させていただきます。

●社員会費

明見睦子／足達新／伊藤誠／李相善／岡田一／岡田光浩／川端勝／北垣俊一／齋藤公代／高岸泰子／新田香織／端無勝／平山隆史／松原正／藪内資子／湯川剛

●維持会費

青木洋介／在間緑／家本英里／池田時造／石井琢也／石澤千恵子／石田美咲／伊藤勝／稲垣三千穂／稲富美穂／井上賢／岩田芳晴／内田俊彦／大野典子／岡本修／尾上禮子／蔭山征宣／籠島慎二／印牧武人／河上晃浩／川添稔／菊扇弘子／北田勝／楠井喜代治／古賀暢子／小林与子／斉藤保／坂本任司／澤田靖子／塩尻加代子／實一穂／嶋元純夫／正法地圭／正法地由紀子／白神博子／末永雅典／杉野佳代／須藤敏浩／瀬戸川弘子／袖山良一／高橋研造

●賛助会費

赤石尚子／浅野敏弘／浅野直人／有山英里／石井奈那／井上松月／今枝ゆかり／入江保夫／宇田和博／打越道夫／太田愛子／大野篤一郎／小笠原良二

●法人賛助会費
京都西南ロータリークラブ

●里親会員
今野裕章／下村蓮実／能登秀美

●一般寄付
JA F S事務局／芦屋クローバー会／熱田親憲／大久保洋子／大橋一同／小笠原良二／栗村壽子／コングラント／齋藤公代／櫻井紘哉／篠原勝弘／ソフバンクつながる募金／チャリティショップ KAMU／DINHONG LONG／富松英二／濱田美恵子／原田修一／全国でエミ友の会エミ思いやり運動／福田湧也／藤原正昭／眞砂哲志／松原正／宮野公篤／村上公彦／森本榮三／安田直史／湯川剛

●社員会費

高山恵理子／谷口ちあ子／谷畑正樹／谷山好恵／田村康子／鶴岡陽子／手嶋寛／寺西哲志／外山裕之／中嶋賢二／中嶋多賀子／中嶋ヒロ子／中陣和悦／永田文／中西豊次／中野為夫・桂子／永濱悟／西岡万里／西川信一／仁科浩／野口博司／橋田政子／畠山ひろみ／畠山房子／林和子／姫野佐智子／福田平司／福西礼子／房本晃／藤木茂／古川武／前川匠／眞砂哲志／松岡利成／松田勝也／松原洋子／宮山聡／妙代和也／村上泰代／山路英子／山田明子／横山昌三／吉田準・聖子／米田典子／和田征子

●賛助会費

赤石尚子／浅野敏弘／浅野直人／有山英里／石井奈那／井上松月／今枝ゆかり／入江保夫／宇田和博／打越道夫／太田愛子／大野篤一郎／小笠原良二

●賛助会費

赤石尚子／浅野敏弘／浅野直人／有山英里／石井奈那／井上松月／今枝ゆかり／入江保夫／宇田和博／打越道夫／太田愛子／大野篤一郎／小笠原良二

金井英夫

●フレンドシップ国際基金

辻本選手／出口貴之／鳥居建十／橋本隆／法花敏郎／毛利吉男／山本宏昭／吉田俊朗

●ブルーオーシャンプロジェクト

川本裕子／渡辺治彦

●地球幸せ募金

小代利子

●東日本大震災復興支援寄付

元橋亮治

●ラオス学生寮指定寄付

高瀬稔彦／渡辺治彦

●新型コロナウイルス緊急募金

○アジアの子どもたち支援・国内留学生支援

アジアンチャリティフェスティバル実行委員会／阿部恩／安藤謙治／石泉ふれあい味噌工房／内海陽子／梅本隆司・富美子／戎野博太郎／大隈章・禎子／大阪聖アンデレ教会／小川富／柏原允子／恵愛保育所／興水飛鳥／斉藤理美／設楽宏幸／仙野和子／高瀬稔彦／竹田裕子／東代清隆／ドミニコ会聖ヨゼフ修道院／豊中友の会／中須賀敏子／中村光一／奈良友の会／日本コイ／ニア福祉会／(株)野口殖産／畑谷幸一／林和子／東野栄子／平野千晴／福西礼子／細谷泉夫／柳原富美子／山口幸子／友愛幼稚園／横井百合子／レデンプトリスチン修道院

●フィリピン・台風被災者支援寄付
秋山タカ子／樺山常男／浅野直人／安宅義人／天津貴志／天野紀／池田ミオ子／池田美奈子／井坂猛／石原基義／一瀬由起子／伊藤亮三／伊奈徹／岩田芳晴／岩本郁子／宇田和博／大隈章・

岡村房子／荻原万紀子／奥村文子／小野英俊／貝柄徹／垣鍔祐／勝原慶子／加藤昌彦／加藤美樹／鎌田公子／亀谷眞佐美／川口勝三／川崎隆二／川端香織／河村徳次／川村幸正／河本朋子／北川健治／木村征代／木元典子／小出幸代／小阪勝／小島学／小谷正登／小林照子／小林陽子／昆文彦／笹原由美子／真田朱美／澤智子／謝秀連／島田真知子／下久保恵子／白山礼子／鈴木禎子／聖母奉献修道会／関川温子／高橋弘美／高橋幹雄／田口博國／竹内泰子／竹原庸起子／田中佐苗／田中通成／谷奥恵／谷口倫子／田宮節子／日野西光尊／塚本善弘／月城文子／辻昌子／辻益廣／鶴丸志よう子／出口豊子／友成陽子／友松千草／鳥井章司／中岡浩司／中島節子／中村恵美子／中村隆／仁井恭子／西田京子／八田磨／羽田孝彦／日高雪子／平岡由紀子／深井正博／福岡誠之／藤木茂／藤原克彦／堀口節子／堀米弘子／牧和矢／松本和子／眞鍋ミサ子／三里健一／水本裕子／溝口清子／矢賀繁之／八木澄子／安井映似／柳本京子／吉野基平／豊松寺

●法人賛助会費

（社福）一粒福祉会／(株)ウエストフィールド／京都西南ロータリークラブ／(株)グローアップ／子どもの平和と生存のための電話館基金／寝屋川教会／パシフィックリードジャパン(株)／やすふく内科クリニック

●里親会費

赤石尚子／明見睦子／浅香真理子／幾谷眞規子／岩田史子／梅本仁美／大島久子／大畑直之／大林昌子／大平英明・さゆり・こはる・ほのか／小笠原喜照／海津加代子／加藤美樹／JA F S 関東／印牧武人／川端香織／北畑哲治／北村晏一／木村千鶴／木村征代／小谷正登／小林剛／Compass Tokyo Japan／佐藤雅美／謝秀連／島

●集めるキャンペーン（外貨）
宇田和博／渡辺治彦

ウクライナの危機に対するJA F Sからのメッセージ



ウクライナの危機を目にして 運命共同体の地球
今こそ平和を祈りましょう

JA F Sは”誰もが生まれてきてよかったと思える社会の創造”を目指す団体として、
このメッセージを出させていただきます。

Facing the crisis in Ukraine, let's pray for peace and justice now,
as one community sharing a common destiny on the earth.

JA F S/AFS is aiming to create the society where everyone is glad that we were
born. As such an organization, we will send the above message.

京都橘ライオンズクラブ

●アジア・ネットワーク奨学会費
上野孝一／村上公彦／吉田俊朗

●アジア・フレンドシップ夢基金寄付
JA F S 歩く会／日生地区会／村上公彦

●アジア・子ども支援寄付
大石みどり

●インド・ムスカ村医療支援
仙野和子／東代清隆／奈良友の会／柏江宏

●インド・H I V子どもと家族支援会費
苗村登美子

●コスモニケタン指定寄付
伊奈徹／戸田恭子

●スリランカ・サルボダヤ支援会費
中西豊次

●ネパール・バイオガス寄付
設楽宏幸／人見秋夫

●ネパール・ピトウリ支援会費
大谷英一／大谷臣子／小川幸子／倉光和之／小松朱美／前田美津代／前田豊／宮本博幸

●ネパール・地震被災者支援寄付
饒平名知幸

●ネパール・学校建設支援寄付
福永有花／横田美智子

●フィリピン・教育支援寄付
JA F S ハルハロ

●フィリピン・ストリートチルドレン指定寄付

「おしん」を見て日本にあこがれる

私はバングラデシュの農村で、30万人が犠牲となった独立戦争の最中の1972年に、11人兄弟の6番目として生まれました。

小さい頃、日本は最先端技術が進んでいて、努力家を育てる国であることを知りました。テレビドラマ「おしん」を見て、日本に行けば努力家になれると思い、高校卒業後、家族の支援を受け、その夢を実現しました。

1994年に来日して最初は、埼玉県春日部市の日本工業大学留学生別科で1年半、日本語を勉強し、アルバイトしながら頑張りました。その後、千葉の城西国際大学人文学部に入学し、起業について勉強しました。卒業後は一時帰国した後、千葉大学大学院経営学部博士前期課程で企業マネジメン

トの勉強をしました。ハクキンカイロ株式会社貿易部に2002年に入社し、現在は海外事業部で主に欧州向けの輸出を担当しています。バングラデシュ人の妻と2人の子と大阪で生活しています。

活躍するアジア

日本に来た留学生の支援が生きがい

格差を訴え日本語弁論大会で優勝

城西国際大学1年だった96年、留学生を対象にしたNHK大阪放送局主催の日本語弁論大会の募集を知り、2千字の原稿を書きして応募したところ、予選を通過し、20名が出場した大会で優勝しました。

マホメッド・ジャケルさん
(バングラデシュ)



ジャケルさんの著書表紙

い彼らを殴ってしまい、自己嫌悪に陥って自らの命を絶ってしまった。貧しくて葬儀も満足に行えなかった。日本では賞味期限の切れた食べ物を処分しているが、これがあれば、バングラデシュ人は十分、生活できる。同じ人間なのに、この差はなんなのだろう。涙が出そうになった」というものです。

城西大の留学生スピーチコンテストで

は毎日新聞社賞を受賞。千葉県東金市の広報誌には私が書いた「水と緑の国バングラデシュ」が1年間毎月連載されました。

衝撃だった「パンツを脱ぎなさい」

今、最も力を入れているのが、バングラデシュからの留学生の支援です。

編集後記

皆さん、コロナ禍お疲れ様です。こういう時こそ、心を優しくし、一つでも自分がしてほしい事があれば、人にするように心がけてはいかがですか。少しは心が安らぐかも。でも難しいですね。(金)

クライナの国旗。青色は空、黄色は豊かに実る小麦を表すという説が、心にしっくりきます。平穏で澄んだ気配が、平和への思いになじます。大多数の思いは同じ。平和な暮らしを国を世界を殺さないで。(川)

スクして我と汝でありしかな。俳人、高浜虚子にこんな句がある。85年前、海外に留学する門人の送別会の席。感染予防にマスクをつける日本人の律儀な習慣が連綿と続いているのを知られたと思います。(敏)

末の大阪・北新地の診療所放火はじめ、地域医療に献身する医師の受難が続く。故郷で開業の親友に「気をつけて」とメール。「患者は皆顔見知り。往診は看護師と一緒に。心配で無用」。元氣な返信に安堵した。(督)

突然ミサイルが飛来し幸せな生活が破壊された一國を奪われるかもしれないウクライナ国民の悲しみ・不安・恐怖はいかばかりか。こんな暴挙を許してはいけない。ロシア非難・戦争反対の意思表示、支援寄付を。(和)

わが家の東隣は、25年前に引越して以来ずっと畑地でした。家を購入した決め手の一つが、隣が空いているので窓から日光が入り、外が眺められること。山や空も見え、隣の畑の緑が目に入ります。畑地の半分は手つかずで自然まかせでした。

引越した頃に畑の世話をしていたおじいさんは、やがて亡くなられ、相続した息子さんが週末に来られるようになりました。畑を続けられたのは、宅地より農地が固定資産税が安いこともあるでしょう。もう一つは、その畑地もわが家も周辺も、元はその方の農地だったので、大部分を手放しても、最後の一角だけでも先祖からの農地として守っておられるのかなと想像していました。

昔は春になると一面の菜の花畑だったそうです。菜の花漬けは、今では作る人が少なくなりましたが、地域の伝統的な農産加工品です。地元の小学校では、農家の協力を得て、1年生の秋に菜種をまき、2年生の春に菜の花を収穫して菜の花漬けを作る学習をしています。

最後に残った隣の小さい畑から、私もこれまで四季に応じて、色々な草花や虫たちを楽しませてもらいました。4月の今、例年なら、草の芽吹きで地面が緑色に染まり、野の花がたくさん咲き、種々の蝶ちよが飛んでいました。夏は、夏草と土からわきあがる“夏の夜のにおい”が心地好かった

環境コラム

守れなかった小さな自然

HPもぜひご覧ください

HP (<https://jafs.or.jp>) をご覧いただいていますか？すぐにお伝えしたいニュースやイベント情報を、こまめに発信しています。JAFSにクレジット決済でご寄付くださる際は、HPの寄付ページをご利用いただけます。進行中のアジア支援プロジェクト一覧もぜひ確認ください。

入会ご案内

皆さまが会員となってサポートして下さることで、安定した活動計画ができます。継続した活動をしていくためにも、ご協力をお願いいたします。

A. 維持会費	年額1口	12,000円 (月額1,000円)
B. 賛助会費	年額1口	6,000円 (月額600円=振込手数料含む)
C. ジュニア会費 (高校生まで)	年額1口	1,000円
D. 団体会費	年額1口	20,000円
E. 法人賛助会費	年額1口	50,000円
会費・寄付の振り込み先		
郵便振込 00960-6-10835		
三菱UFJ銀行中之島支店 普通1007011		



募金にご協力をお願いします

アジアの安全な飲料水がない地域で
貧困に苦しむ人々を支援する活動に使われます

郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

編集・発行：公益社団法人 アジア協会アジア友の会

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5階

☎ 06-6444-0587 FAX 06-6444-0581 E-mail asia@jafs.or.jp

URL: <https://jafs.or.jp> Facebook: <https://www.facebook.com/JAFS.NGO/>

2022年4月 149号 発行人：篠原勝弘 編集人：村上公彦

広報企画委員長：法花敏郎

編集アドバイザー：松本 督、黒沢雅善

編集スタッフ：熱田典子、大本和子、柿島 裕、金井英夫

川本裕子

印刷製本：あさひ高速印刷株式会社



HPもご覧ください

コロナによる休校中、家の手伝いで家畜の世話をするパダトラ小学校の生徒
インド、マハラシュトラ州ガッチャリ
リ県。4〜11歳に特集「コロナ禍の中
で⑧ 学びの最前線、工夫と苦悩」

◀表紙の写真 倒壊した家の前でぼう然とする被災者女性。台風ライがフィリピンを襲い、中南部の島々に大きな被害を及ぼしたアンティーカー州パンダン町。
12〜14ページに現地支援活動の報告